

宗教・文化研究所公開講座講演録要旨

東国武士・寺院の活動と京都

―千葉氏とその周辺―

湯 浅 治 久

はじめに

皆さんこんにちは。今日は東国の武士である千葉氏を例にとり、鎌倉時代から南北朝・室町時代に少し入った辺りまでの動きをあぶり出したいと思います。最近の武士や鎌倉幕府、あるいは武士と朝廷との関係の研究は目覚ましいものがあるようです。それは京都を中心とした、京武者と言われるような武士たちによる交流のありかたです。日本の中世は本当に人とモノが活発に動いている時代だと思います。その中で、武士とその周辺に位置している寺院の話絡ませながら、京都と東国の一つの交流のあり方を示せればと思います。

一、平安末〜鎌倉期の下総千葉氏と京都

(1) 千葉常胤の時代

まず、この千葉氏は、関東下総の国の武士です。桓武平氏の流れを受けて、両総平氏というように、上総と下総に力を持っていた豪族です。これが頼朝を助けて鎌倉幕府が開創に寄与するのですが、この千葉氏にとって京都は当初から大きな意味を持ったところであるようです。千葉常胤自身、恐らくは在京経験があり、また常胤の子で園城寺の僧の日胤は殺されてしまいましたが、一説によれば、頼朝の護持僧であると言われ、頼朝のもとに情報を運んでいた人間としてよく知られています。また、東胤頼は千葉常胤の子ですが、この人物は上西門院に仕え、東という一族は、その後和歌の家として有名になり、子の重胤は実朝と文芸活動を行うという「都ぶり」も身につけた武士でした。このように千葉氏と一族は鎌倉幕府開祖当初から京都との関連が強かったということが指摘できます。

(2) 鎌倉中期の千葉氏と日蓮宗

鎌倉中期には、千葉氏が日蓮宗とかかわり京都との関連が出てきます。この時期については、まず野口実先生によって貴重な研究がなされています。東国出身で千葉氏の庶流の出身である了行という僧侶、また道源という東氏の末裔である木内氏出身の僧侶です。彼らは日本を越えた東アジア世界への進出を果たしています。この時期は鎌倉仏教の祖師の動きが活発になる時期で、宗教が活性化していく時代と言えますが、その中で日蓮が出てきて、千葉氏一族と密接なかかわりを持つていくのです。

千葉氏の略系図をみると、千葉介以外にも、相馬、武石、大須賀、国分、東、あるいは木内という一族が分立していきます。千葉介に頼胤という人物がいますが、この辺りが鎌倉中期の人です。彼はモンゴル戦争で九州に下向し、その傷がもとで一二七五年（建治元年）に三十七歳で亡くなりますが、この辺りから日蓮とのかかわりが確認できます。頼胤も含め、父の時胤、祖父胤綱辺りは短命であり、それに対して胤正の子どもである常秀から出る上総千葉氏という一族が房総で総領家をしのぐ力を持っていましたが、宝治合戦で三浦氏につき滅亡し、頼胤がようやく千葉氏の力を盛り上げようとしていたのがこの時代でした。

千葉頼胤の家臣には下総の日蓮の有力な檀越が確認できます。それが富木常忍、太田乗明、曾谷教信という三人で、頼胤の被官でした。日蓮の檀越を調べてみると、下総の国府の近くに住んでいる人たちの姿が一番早く見えるのです。ここで興味深いのは、富木常忍は根生いの下総の武士ではなく、因幡国からきたことです。太田乗明も実は下総の人ではなく越中の人なのです。また曾谷も越中の出身ではないかと思われるふしがあります。そして富木・太田氏らは、本来は国府の役人だったというところが大事です。富木常忍は因幡国の住人で、父と一緒に下総の国にやってきました。彼らは千葉氏により才能を買われスカウトされた人材だったのです。ではどうしてこういうことが可能なのかというと、千葉氏が所領を全国に展開しているからです。千葉氏が全国に展開している所領のネットワークは、国衙のもとに蓄積された人的なタレントをスカウトするうえで重要な役割を果たしていたのです。最近、井原今朝男さん、苅米一志さんらが、国衙の機能、国衙の近くにある寺院あるいは神社の役割を再評価しようと研究をしています。下総の場合も、国衙に蓄積された文化、そして武士たちが所領を展開させていく中で持っているネットワークの二つが、千葉氏のもとに富木、太田、曾谷氏という人たちを呼び寄せ、また日蓮を呼び寄せていくという動きになると言えます。

そこで鎌倉中期の千葉氏の持っている所領間のネットワークについて話をします。富木氏が千葉頼胤の役人として自分の手元に今で言う行政文書を集積します。『日蓮遺文紙背文書』といい、千葉県市川市の中山法華経寺に所蔵されています。それらを見ますと、下総だけでなく、伊賀国、肥前国小城郡など、ひろく分布する所領が確認できます。そういった所領間の交流が、人材の移動や情報の交換や蓄積にも結果し、また富木、太田、曾谷氏という存在を呼び寄せたとも考えられると思います。このような一体的な動きが、日蓮の時代に見られたのではないかと思われるのです。

(3) 鎌倉後期の日蓮宗寺院と京都

日蓮の段階には日蓮宗の寺院はほとんどなく、その弟子たちの段階で寺院が成立します。京都にも、四条門流、六条門流、中山法華経寺の日常門流（中山門流）・日親門流らが成立してきます。鎌倉末期で有名なのは四条門流で、今の妙顕寺をつくる日像も千葉氏の一族だと言われています。ここからも日蓮宗を介した京都と下総が、強い結びつきをもっていることがわかれると思います。

二、南北朝から室町期の武士社会の変化と寺院

(1) 南北朝期京都の寺院社会と東国

南北朝時代になると、京都の日蓮宗寺院も活発な活動を展開しますが、その中でも、中山門流の動きは興味深く、第三代日祐の活動が注目されます。この人物が2度も京上を果たし中山門流をもり立てるのです。当時の京都は、

全国の武士が押し寄せて訴訟を言い立てているのですが、日祐も門流への安堵を建武政権や室町幕府に要求したりするのです。同様のことは下総真間弘法寺の俗別当及河氏や身延の波木井宮原氏などにもみられますが、その最たるものは、四条門流の場合です。妙顕寺は勅願寺や幕府祈禱所となる重要な寺院に成長しますが、その権威を頼り東国の末寺が幕府とのパイプとして妙顕寺に期待するのです。康永から文和、観応という一四世紀の半ばころ、東国の両山日輪が多く書状を妙顕寺に残していて、それをみると当時の妙顕寺と東国寺院のネットワークがよくわかります。また所縁の東国武士たちが上洛して在京している様子もみられますが、彼らは名のある武士ではなく、一ランク下の武士たちで当時の日蓮宗がこうした人々によって支えられていたこともわかります。

(2) 観応期を画期とした武士社会の変化

ところで観応の時期というのは、京都への求心力とともにあつた武士社会に大きな変化が訪れる時期であることが、最近の若手研究者らによつて指摘されています。これは室町幕府の政権維持のための費用調達の方法の変化とともにおこってくる事態で、ようするに従来のような広域的な武士の所領も維持しえなくなる。地域におけるその経営に腐心するようになってゆくと、京都も京都で独自にそうした費用調達を考えざるをえなくなる、ということなのです。鎌倉時代の武士たちのもっていた様々なネットワークはその過程で解体し、それぞれの地域での展開がメインになるわけです。その延長上には守護の分国支配であるとか、鎌倉府など地域的権力の展開があります。列島社会は地域的な分権構造に大きくシフトしてゆくのです。では今までのネットワークはどうなるかというところ、下総千葉氏の場合で言えば、肥前と下総、下総も二つに分裂してしまい基本的には交流がなくなります。観応以前は交流があります。建武から康永元年（一三三二年）、十年ぐらゐの間は交流が見られます。しかしそれ以後はとだえて

しまうのです。

(3) 応安年間の転換―寺院の「交流」へ

千葉氏の場合も、応安年間を過ぎると交流が途絶していき、武士団相互の関連がなくなっています。これは一つは世代交代もあります。世代交代すると次にうまく連続しません。この頃になると、京都でも東国武士たちはほとんど在京しなくなるのが指摘されております。では寺院間の交流はどうなるのかというと、これは形をかえて継続してゆくのです。日蓮宗で言えば、日親という僧侶の活動が興味深い。先年『戦国仏教』という著作でも紹介しましたが、八面六臂の活躍をし、京都の本法寺あるいは頂妙寺というお寺を盛り立てます。一五世紀の前半から半ばぐらいの時期です。彼の活動は東国から京都、そして九州にも及んでいるのです。また六条門流の本圀寺の事例が興味深い。この寺院の末寺に横須賀の三浦に大明寺という寺院があります。応安二年（一三六九）に大明寺の石渡平三郎という大旦那が、「法華平三郎」と言われて本圀寺日静の葬儀に出席している記録があります。石渡氏は、本格的な武士というより中小の武士、しかも財力を持つ有徳人です。有徳人が担う諸地域の寺院が、京都の寺院を支えているのです。本圀寺の場合も、若狭の長源寺、三河、越後、越前の金津、小田原、鎌倉というように独特の地域間の寺院のネットワークを持っていることもこの記録から明らかになるのです。また石渡氏の一族には同時期に京都山科の醍醐寺の東国における荘園所領の代官を請け負っている者があります。やはり全体として寺院と結びついた有徳人が都鄙間の交流を担うような時代となってきたのです。では武士はというと、室町幕府の管内では守護や地域の有力領主は在京していたようです。遠江国の原田庄の原田氏という武士は、しばしば在京し原田庄の代官とも交渉を持っています。また勝田・横地・浜名氏などという武士たちもそれなりに在京活動を行ってい

ました。しかしそれ以東の東国武士たちは、基本的には以前のような京都との関わりを持たなくなつてゆくのです。

おわりに

改めて考えてみると、ではなぜ寺院の交流は存続するのか、という問題があります。一つは「信仰」です。信仰はきわめて強い人々のつながりで、それは「信用」そして信用経済につながります。たとえば武士たちの遣う為替かわせなど信用経済は、一五世紀をピークにして衰退してゆくと言われますが、伊勢の御師での宮後三頭大夫という人物の関連史料をみますと、為替の文書が頻繁に利用されています。信用経済と信仰は明らかに関連性があります。これは宗教を介した人々の間の信用が強いからであつて、むしろ、その辺りに江戸時代に展開する流通基盤のようなものもあるのではないかと思ひます。考えてみれば、中世の商人の多くが僧侶や神人といった宗教的な色彩を帯びているという、網野善彦さんの指摘もあります。それももつともだと思ひます。ある意味では、それが一つの大きなよりどころになると思ひます。

さて、今回は私の力不足で日蓮宗の問題しか扱えませんでした。ほかの宗派はどのようなのでしょうか。たとえば京都四条の金蓮寺という時宗寺院であるとか、鎌倉末期からの仏光寺派という浄土正宗の動きであるとかが重要です。また律宗関係の史料に出てくる東山太子堂というのがあります。これは、別名、「百毫寺」と言つて今でも下京のほうにあるようですが、もともとは東大谷にあつて、知恩院の中門の西北にあつたそうですね。この東山太子堂は、神奈川県金沢文庫の史料によると、伊勢の大日寺と鎌倉の称名寺と為替を組み、銭のやり取りをした機能が確認できます。今後、中世後期のほうを見据えつつもう少し事実を掘り起こしていくと、寺院の交流の実態もさ

らに見えてくるような気がします。最初は鎌倉時代の武士の交流の話でしたが、最後は自分の専門に引き付けてしまいやや主題からずれてしまいました。以上で私の話を終わります。ご清聴ありがとうございました。

へキーワードへ

千葉氏 日蓮宗 在京活動